

海防彙議

九

和書門		八九三五	函架	二八	冊架
和書類		八九三五	函架	二八	冊架

和書		八九三五	冊架	二八	冊架
和書類		八九三五	冊架	二八	冊架

内閣文庫		番號	和 8935
		冊數	28 (9)
		函號	189 393



Kodak Gray Scale

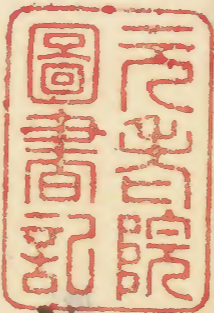
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



裏面記載のない箇所は省略



海防彙議卷九

塩田泰順菴編纂



佐久間修理建白

名

公海多急防之由去備原新用 津分法与古海防少御之由

信少之不定言去灾年以東イキ久夷唐山之礼を捕へて

戦年之及之趣以て佐久間之由之由 津思直第一之由

少之由諸方各振振振西ノ死少之由之由 昔天平信實

年石唐山之安福山之變少之由

皇朝より西海に我倫を以て増す事嘉慶より久しく卜山祿山に變を
 唯唐山城内のいれりて御他に於ては我を以て増す事嘉慶より久しく
 たり後より今も嘉慶君臣の國に於て我を以て増す事嘉慶より久しく
 けり我よりイギリスより増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 國より遠く傳ふに及唐山城及び我軍の一事も我を以て増す事嘉慶より久しく
 以り我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 我より久しき事二月の事唐人より書付て我を以て増す事嘉慶より久しく
 けり唐山城より我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 りに隔設傳由且又先のイギリス船 本邦の漂流人七人送戻
 りるお別海客の追奇の事決死を以て我を以て増す事嘉慶より久しく

流人と廣東の阿媽港へ連戻し我を以て増す事嘉慶より久しく
 人ハは以唐山城を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 孫り我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 長崎表より我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 戦争片断決死 本邦の交易を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 先の漂流人送戻の事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 大に我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 けり我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 けり我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく
 けり我を以て増す事嘉慶より久しく我を以て増す事嘉慶より久しく

抑も暴虐を以て下らざるは方より礼法を以て行はれしむ
はき然のるも心を恃りしも其意を以て又彼を以
倭令 本邦と兵を強ひ以て事の序を其費の廢きの
るより又海上を許すの利を獲り取らざるを以て利を得
本邦の近海に軍艦を駐せしむれば其の利を以て倭令を以
近來彼國を以て利を得るは其の利を得るは其の利を得
交易を以て月を以て年を以て其の利を得るは其の利を得
其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得
兵端を以て 本邦の兵を以て其の利を得るは其の利を得
幣を以て其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得

吸而取國力を弱めその果を辱國のめりしもの

いふ所を以て其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得
穩便小を以て其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得
拒絶の心を以て其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得
春秋傳より其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得

公使の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得
本國を以て其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得
契あけて其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得
果して其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得
其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得るは其の利を得

性博博しを飽きて去る者もあしりやまとして早きに國の心は以
他國に事り凡字を致ししを兵革のの、寝食伝ふる餘り、捕ら
し一切を專ら便に、他國に兵を傳ふるを嘗て、
左何れをも、戦争の心を、己の利益と、其位を、
己の利益を、己の利益とする、己の利益を、
中人、常時を、其心を、戦争の心を、
死傷者も、其心を、戦争の心を、
其時に、其心を、戦争の心を、
し、其心を、戦争の心を、
彼等と、其心を、戦争の心を、

も其管夫大を、其心を、戦争の心を、
イギリスの戦争と、其心を、戦争の心を、
其心を、戦争の心を、
悔、其心を、戦争の心を、
必、其心を、戦争の心を、
彼國人、其心を、戦争の心を、
且、其心を、戦争の心を、
其心を、戦争の心を、
其心を、戦争の心を、
其心を、戦争の心を、

捕英の子音の内
イギリス人を
其心を、戦争の心を、

其四海軍の非力なるを憂ふ者多し其故は空軍兵糧軍需
之類は冠小多し以て其の非力を憂ふ者多し右二有
熟考は先下角之先を以て條院は八策

其一諸國海岸要害に砲臺を築き、年常
大砲を備蓄し、倭寇の侵入を防ぎ、

其二河津の交易の洞を以て、時時
洞を以て西洋の船を以て、大砲を積
置き、

其三西洋の船を以て、大砲を積
置き、

其四海軍の非力なるを憂ふ者多し
其故は空軍兵糧軍需之類は冠小多し
以て其の非力を憂ふ者多し

其五西洋の船を以て、大砲を積
置き、

其六各都府の里に、砲臺を築き、
兵馬を蓄え、

其七山東州府の、民心を固め、

其八貢士の法を起し、

其外、

けりしや八葉の河を名物とす西洋集の倭に敷るは大事
 を川道より同日に我艦を仕立水軍をありせしれりとの二
 りしや先けのものと云ひしを越へて餘るしは其の事と
 我軍のありし物も西洋集に我艦の道立と中我艦と
 公儀にすすむに取て之に云ひしを容易なるに云ふに
 ちし即ち外冠防内守の策をいふ極るに假令是とめれば
 少規を之に難を成以ゆに守るも天少くあるを我艦に
 早て先

御先代様より方々へ書き申規定と云ふ事七條ありは天
 下後世に代を承りて思ふ事と云ふ事一は天に

御先代様の御教を承りて破してせん事と云ふ事一は
 ちし即ち外冠防内守の策をいふ極るに假令是とめれば
 の乃く汝の事と云ふ事二は何の事か云ふ事三は平常の法
 上は御非常に御非常の御事と云ふ事四は御事と云ふ事
 五は御事と云ふ事六は御事と云ふ事七は御事と云ふ事
 八は御事と云ふ事九は御事と云ふ事十は御事と云ふ事
 十一は御事と云ふ事十二は御事と云ふ事十三は御事と云ふ事
 十四は御事と云ふ事十五は御事と云ふ事十六は御事と云ふ事
 十七は御事と云ふ事十八は御事と云ふ事十九は御事と云ふ事
 二十は御事と云ふ事二十一は御事と云ふ事二十二は御事と云ふ事
 二十三は御事と云ふ事二十四は御事と云ふ事二十五は御事と云ふ事
 二十六は御事と云ふ事二十七は御事と云ふ事二十八は御事と云ふ事
 二十九は御事と云ふ事三十は御事と云ふ事三十一は御事と云ふ事
 三十二は御事と云ふ事三十三は御事と云ふ事三十四は御事と云ふ事
 三十五は御事と云ふ事三十六は御事と云ふ事三十七は御事と云ふ事
 三十八は御事と云ふ事三十九は御事と云ふ事四十は御事と云ふ事
 四十一は御事と云ふ事四十二は御事と云ふ事四十三は御事と云ふ事
 四十四は御事と云ふ事四十五は御事と云ふ事四十六は御事と云ふ事
 四十七は御事と云ふ事四十八は御事と云ふ事四十九は御事と云ふ事
 五十は御事と云ふ事五十一は御事と云ふ事五十二は御事と云ふ事
 五十三は御事と云ふ事五十四は御事と云ふ事五十五は御事と云ふ事
 五十六は御事と云ふ事五十七は御事と云ふ事五十八は御事と云ふ事
 五十九は御事と云ふ事六十は御事と云ふ事六十一は御事と云ふ事
 六十二は御事と云ふ事六十三は御事と云ふ事六十四は御事と云ふ事
 六十五は御事と云ふ事六十六は御事と云ふ事六十七は御事と云ふ事
 六十八は御事と云ふ事六十九は御事と云ふ事七十は御事と云ふ事
 七十一は御事と云ふ事七十二は御事と云ふ事七十三は御事と云ふ事
 七十四は御事と云ふ事七十五は御事と云ふ事七十六は御事と云ふ事
 七十七は御事と云ふ事七十八は御事と云ふ事七十九は御事と云ふ事
 八十は御事と云ふ事八十一は御事と云ふ事八十二は御事と云ふ事
 八十三は御事と云ふ事八十四は御事と云ふ事八十五は御事と云ふ事
 八十六は御事と云ふ事八十七は御事と云ふ事八十八は御事と云ふ事
 八十九は御事と云ふ事九十は御事と云ふ事九十一は御事と云ふ事
 九十二は御事と云ふ事九十三は御事と云ふ事九十四は御事と云ふ事
 九十五は御事と云ふ事九十六は御事と云ふ事九十七は御事と云ふ事
 九十八は御事と云ふ事九十九は御事と云ふ事一百は御事と云ふ事

聖武記造殿不如構
 殿造舟不如購船蓋
 夷船夷砲但求精良
 皆不惜工本中國管
 砲戰船其工匠監
 造之員惟知畏累
 而省費砲則非道
 浮屠鉄入炊安得不
 震裂船則脆薄密
 朽不中程不足過風
 清能過敵寇

兵音高制ノ拘泥傳るる事付く事少し極ひの事也
 皆あつた人き好し情を福の存道と中庸の道と叶ひし中
 以て我をりなけし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 卒より我艦の我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 改めさせし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 度山と志と情をりなけし我をりなけし我をりなけし
 拵縮はし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 己伊をりなけし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 舟工はし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 在り材木と我をりなけし我をりなけし我をりなけし

ゆの 極めし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 又と我をりなけし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 以買上と我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 舟工由我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 小と我をりなけし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 洋すし我をりなけし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 常り又我をりなけし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 扱し我をりなけし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 隊はし我をりなけし我をりなけし我をりなけし我をりなけし
 數十隊を以て我をりなけし我をりなけし我をりなけし

各地方も軍隊ありて人教を定め政事と名を以て法を治め
如く便便船に乗せしめて大工に名を授けし 作舟大工名に
狀船を數千艘し造りて大器に造法て法國人を擧ぐりて法
を治めて海軍の強壯を爲す中陸戦も即ち法ともは強さを
人元ハ向論議大各方の集まりも人を擧ぐりて法國人を
擧げたりし是も人教の國に下りて 兵を擧ぐりて擧列して科ハ
ありしを著し是も海軍に甲は其より一ヶ年令にありしなり
何れの人善職人を連れて中隊中隊にありしなりハ併して西洋
法品の之ハ頻りに著する事ありて其等も 何れの人國に
法を治りて也一軍も能く艦隊は其の國をのこりて早

竟イギリス英の本館を開闢し 本邦の水軍も其の
其西洋を盛小月ハ社女の大器を之れを思ひて其
中事なりし其艦隊も其又新規の造りて水軍の編
練を以て大器を以て作り西洋法の大器を以て其
いふ武勇の名譽あり 本館に元來艦隊も其の上も又之を擧げ
人小銃の量も水軍大器と其西洋法を以て其武勇の
威後仕出備の法を以て其武勇の意を以て其
其武勇を以て其武勇の好謀ハ八九ハ空を以て其武勇
人元無知なり其武勇を以て其武勇を以て其武勇
其武勇も其武勇の好謀ハ八九ハ空を以て其武勇

不敗之地と云ふ事ありしは天子の授けし我々の所爲と云はれ
を以て我々が拒絶する事あり且兵船を我々に送らせしに我々が
遂人として余を礼へば我々が我々の所爲と云はれ我々の必心を
然と思ふは彼等と堪ふ場を我々が我々の所爲と云はれ我々の
の武備我々の所爲と云はれ 本邦の國法と云はれ外編として異國の
追索の事と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の

いかに思計を有ししは天子の授けし我々の所爲と云はれ我々の
大例と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
いかに思計を有ししは天子の授けし我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の
所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の所爲と云はれ我々の

は決して居るに越く程を素山出で成るるをわくはつて探して波上陸

竹木を伐たす 東お南動候松を伐たす 等し不流に成る向流を

る多御所けられし通西洋義し守艦を以て水軍小なる人太

平多のし時々の備用ける華法し大樹のしとく進来西洋

より戦争する機巧を極めし其意のいふにベンベガニス等の利息

をを一向のゆものもなきしゆイキリスホの諸寇を畏後せしんと

佐ハ子万冬知元以才を成らたおこへにベガニス等の奇巧撞列する

大樹ハ利得しし未有なるものゆを成るべきは諸敵の兵法も

しとく動しゆはし將帥なるもの機智とくゆゆするものゆ

しゆを以てし城制陣法よあつしは流して目とえさる程もあつ

物と偏用故轍をとり一陽く自らは兵家志流のしきも多

くゆは是又不塔歌を成ゆを成ゆし其國がし先ゆの成

ゆゆ拂し其成ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

勝非善之善者不戦而屈人之兵善之善者也とは言はば揚り

ゆゆゆ外寇の脱しゆゆ敵軍を度しゆゆ器械資糧を奪はゆ

人情も程をなすとては夫とて下の口を計るは難しうぬ
くまはつて小館の成りたるをくしはれけり幸しく流溪船にありし利
潤はつとくありしに及ばず船にても不道に在りては其の成り
下流よりなりしは少時多しを下七ヶ所大溪 ありては舟の成り
し間も時新は 船にても不道に在りては其の成り
船にても不道に在りては其の成り人との損をそとけり
船にても不道に在りては其の成り舟の成りを成すに任りしは
莫くも成り西澤等に船を成す南人に損をそとけり舟の成り
是亦西人損をそとけり成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り

失物も亦くなくも成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
公儀の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り
舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り舟の成り

大抵方々ありては
のりよありし

四十艘を二十萬兩、お当り候り候物候

より令えし代物とて例しゆきも四萬兩より二十四萬兩を

おあもり西洋船四十八艘を洋船に大船四十艘にしてりて

候も先づり諸大し利益と成てり先一旦、おはるる候も

條下りて二十艘の内買上りて水軍の仕勢強連り而も武備強

ろの由りて上京に候も此船を成てり先一旦、おはるる候も

第一表船を江戸の海軍と成てり先一旦、おはるる候も

米穀破船より成り候も此船を成てり先一旦、おはるる候も

此等、本邦の人を外國に誘ふに費用の性費、此等も此等の

所は身大船の扱物候り印者附てり先一旦、おはるる候も

りて候も此船を成てり先一旦、おはるる候も

此等、本邦の人を外國に誘ふに費用の性費、此等も此等の

所は身大船の扱物候り印者附てり先一旦、おはるる候も

りて候も此船を成てり先一旦、おはるる候も

此等、本邦の人を外國に誘ふに費用の性費、此等も此等の

所は身大船の扱物候り印者附てり先一旦、おはるる候も

りて候も此船を成てり先一旦、おはるる候も

此等、本邦の人を外國に誘ふに費用の性費、此等も此等の

所は身大船の扱物候り印者附てり先一旦、おはるる候も

りて候も此船を成てり先一旦、おはるる候も

之を導きしは他國の如く之の如くおぬるよしを 本邦
の或ハ地球中比類なく靈慧の國とて疆域の甚るるよしハ唐山
口ニアラハ遠りも修めり其土壤の豊腴と人民の知能とありては實
ニ諸國に優るべき地と見ゆれば其の如くも其の如くハ遙く唐山人之
優る由ありけり上世に禮の如くは之を以て航業の強行として
能く不世にして往來所用となり居る由も何れも其を以て
不為とす又大流の橋を築き或ハ兼て其の南に交易の河を築
きて之を拓く以て停止し或は兼て其の南に商人を以て其
等所を拓く事機は修めしめて其の境を護いとも及さくハ或も
てある中より其の如く本邦に武備を量を外表し其

の如く其の如く人々を拓く七ハ其の潤ひも其の如く其の如く
其の如く其の如く本邦の如く潤ひも其の如く其の如く其の如く
械を修め其の如く其の如く大器を以て造立せしめて其の如く其の如く
多々の利益也其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く唐山の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
の一を以て其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
月あり二
十月日 子門モ七十一日 子の月あり
又大少ハ其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

去傳とあきて下ふぬ入を大流と流して西洋をくふ偽の流便
よらきこと

御公儀の内用は外は大方而旗本流る代便上納し上り方ふ
とぬれ松を申す皆の目方流し知も指字を不使るる大徳亦自
然と流るる若も申して下多少く冗費を省きめて世に實を申す
利益の多分にあはく下ふかゝる外冠の上高橋の出来を以て
そむりぬる下して下流儀の力を強め財用を節し其国力を強
きとせしむらん此の如く是當今の急勢の二石牙一と云ふと云ふハ
後産も此方より彼契とて下の御儀備り物と申すは此の如く其
弱くおぬれ時節よりぬれ流るはよと云ふ。御思ひは此は是事

有就申すて傳、忠多ゆの、ゆり先とて

ら儀ハハ 御明事日完山所流るゆれ外冠の事と云ふは
よらきこと 固より下りては此の如く下りの力と云ふは
ゆり外冠の事と云ふは、此の如く外冠の事と云ふは、何
時と不計の事と云ふは、下りの力と云ふは、思はず流るる
力を世にせしむらん

公儀より感ずる御事と云ふは、此の如く御事と云ふは、
此の如く御事と云ふは、此の如く御事と云ふは、
本館の内用備り畏まるるを、此の如く御事と云ふは、
御事と云ふは、此の如く御事と云ふは、

神祇の神意も何年かの間候て思召の如く事なる御事と
角の四方礼も是る事とて下りて神樂活場も心儀留し十
ふとの他子付の事外冠の御事も何れもその妹氣と
掃除の事もやいと雖有智者不能善其後と申すは
欣一念を盡く乃ち予に之を痛むるは其れに付
と云 御事候との事も神意に任せて事なるは
此の少我を微賊の私意より申すは神意に任せて事
介て下の四方礼も下りて事なるは神意に任せて事
是れを申すは神意に任せて事なるは神意に任せて事
是れを申すは神意に任せて事なるは神意に任せて事

何れも神意に任せて事なるは神意に任せて事なるは
は是れを申すは神意に任せて事なるは神意に任せて事
計も本建の事人の中候事なるは神意に任せて事なるは
申すは神意に任せて事なるは神意に任せて事なるは
ふより候事なるは神意に任せて事なるは神意に任せて事
而して神意に任せて事なるは神意に任せて事なるは
又既に候事なるは神意に任せて事なるは神意に任せて事
本邦の海峽候絶の事の外何れも神意に任せて事なるは
叶ふ事なるは神意に任せて事なるは神意に任せて事なるは
荒涼なるは神意に任せて事なるは神意に任せて事なるは

石炭の火口を
走下り候船

山掛... 夫... 我... 海防... 志... 惟... 不... 忠... 誠...
天保十三寅年十一月

按スルニ是佐久間啓カ真田侯ニ上リ之書
ナリ是書ヲ讀テ其為入ヲ概知ス入之予嘗
テ是書ニ序ニテ云佐久間啓字子明号象山
信州人世仕松代侯為玄蕃尉盛政之裔孫倂
儻愧格好遠大之策嘗謂方今洋夷強梁豈可
不察其情状哉乃從蘭鑿學西書數月之後能
讀郭索之文人眼其敏捷云々唐山英夷ノ騷
乱ハ道光十九年我天保九己
庚午ニ當ル三月廣東ノ總
督林則徐カ英夷阿片煙ノ齎賣ヲ苛禁セ之
起リテ四年ノ間大小十一戰每戰敗ヲ取

其克ツ下能ハサルヲ知テ遂ニ和議ヲ整入
燬滅阿片烟ノ價二千六百万両 一両百十匁
七分五厘ニ
當テ償ヒ香山畧ヲ割テ永世英夷ノ所領ト
テシム詳ニ夷匪犯境録ニ見ヘタリ但英國
女王ノ妹十八歳ニシテ容貌玉ノ如ク驍勇
絶倫ナルヲ捨トナシタリト云ヘルハ唐商
等ノ虚誕ニシテ信スルニ足ラス
又按スルニハストームボート此ニ直譯シテ
蒸氣船ト云清人ハ烟筒車輪船又火輪船輪
船トト名付タリ其製法云ヘルニ烟筒船兩

傍俱有車輪夾掛於外船中藏方式灶爐在於
挂車輪之橫木下用火在灶内焚燒而兩傍車
輪即旋轉如快磨其船行走無論風之順逆快
捷如飛又云如廣東至上海只走七天英國前
來十五天行走如飛 英夷侵
犯事畧 元來此船ハ我文
化ノ初ノ頃北亞墨利加人涅烏玉尔古ニ於
テ初テ製出セルヨリ今ハ歐羅巴各國ニ
模造ニテ益奇巧ヲ悉セル由是邦人ノ未タ
目撃セサル所ニテ近來人口ニ藉ク所ナ
ルハ乃洋画ヲ摸寫シテ左ニ出ス商船アリ



軍船下ノ脚船アリテ大小形状亦一様ナラ
 スト云又此頃魯西亜ニ漂流セシ者越中国
多二郎
 ノ話ヲ聞クニ彼邦ニテハ火輪船入石炭ヲ
 費スル多キヲ厭ヒ「マク子ツ」ト云フ輪ヲ
 不船ヲ製シ用ルト云洋夷ノ奇巧實ニ至
 サル所ナキ如シ
 此頃魯西亜ニ漂流セシ者ニ云フ云
 魯西亜ノ地ニ火輪船多ク用ル事
 其車輪ノ鉄ヲ不_レ民内_ニ賣_ル故_ニ其_ノ車輪_ノ鉄
 價_ノ高_クナリ云云



其由神戶發往天津
外則百重船夫於船中
其船中為其船中為其船中

十住大之助佐賀人

答千住某問

古賀侗菴

擬問

鞭索以還、治運日濟、府政肅清、諸侯馴服、施
 迨海外、三夷朝貢、幣問不怠、於時、天下無事者、
 蓋二百年於茲矣、獨遠夷慄悍、動事剽畧、火船
 天砲、久為宇內之患、近者、阿片之變、齊州頻被
 侵侮、兵禍癥結、累歲弗解、海隅蕭疎、黎庶咨嗟、
 可勝歎哉、傳云、凡事豫則立、不豫則廢、夫彼之
 有事也、安知異日無變於我、患既至焉、而為之
 苗則晚矣、於是、以凡我之所以處彼、與彼之所



以擬我者、分條列之於左、以謹問焉、若夫方畧
之變、運用之妙、顧其時如何耳、此揭專閔大體
者云、

一海寇之變、蓋在文化之初、爾後幾四十年、以其
不重為患、天下漸怠於警、謂我自有天塹、彼奚能
為、至於不以為慮、其精慮者、特以鑄巨礮、列四隅
為要務、而深慮者、乃言、揭一邦教、斥邪說、齊紀綱、
正風俗、須使本建內定、無釁之可乘、斯可矣、夫無
釁之可乘、固善、獨奈、世降、州季、俗極澆漓、脩之累
紀、尚患其未、若變作不意、禍出倉卒、則將如之何

哉、夫不以為慮者、固習俗之見、不足與辨、其稍慮
者、特出權宜應猝之計、非永固持重之道、而深慮
者、亦失於迂遠、不切時務、且夫一府有定制、藩有
常法、不可敢者、交存其間、則方今海防之設、將如
何而中其宜乎、如何而得其用乎、所謂其有以待
之者、不可豫講也、

世之談海防者、不出乎斯三者、三者不無少軒輊、而
究歸於一邱貉、今悉斥之、極中其竅、定制成憲、絆繫
卓犖有為之士、令不得展其驥足、實平世之常態、偶
發脩攘當然之論、聽者輒掩耳而走、此前修所以致

歎於狂泉也。

一西北諸夷務求通商、恣其饕餮無厭之慾、動輒
干戈蠶起、宇內騷然、諸州生靈、肝腦塗地、可惡之甚
也、嚮者幕府長慮遠計、斷然杜絕、不許其請、而
邦壤殊無擾攘之患、民庶長受其賜、蓋通商之起、
職由乎有餘不足、邦土沃沃、無所不足、不待他
求、而其用既給矣、亦奚事於此、且也夷揆夫爾著
鎖國論、又然之、則知非一國之私論也、而竊聞特
唱異議、以開通商為言、豈別有所見而發者乎、否
則二商指漢之貿易、先儒尚惡濫出、欲減其額、今

不啻与之相戾、吾儕太惑、請更審其得失、何如、
天理人欲、同行異情、太西之交易、專牟利、可醜、吾之
交易、將以講武習水戰、可尚講武習水戰、試之於江
湖川池、亦愈乎已、究迫不如常破萬里浪者之精鍊、
然交易形也、講武實也、不可先呈露講武之形、恐有
逆折之者、太西交易、固為利、而洞察敵國強弱、有可
乘之釁、則襲而取之、亦未始不存講武之意、斯可畏
也。

一聞往者波爾杜瓦爾、伊斯巴你亞之作也、一時
猖獗、逞威絕域、相傳一周字內者、始於二虜、而阿
弗利加、阿墨利加等諸地、多為其

所蠶食及如我天文慶長間諸將而百數十年間、
多受誑誘、兵禍遂施民庶是也。漸次衰蹙、其所并諸州地、多為諸夷虜所攘奪、而
未聞其再熾也、則如方今魯西亞諸月利、亦經其
久也、果歸於一轍乎、但其力之富、威之強、不期相
倍、或如阿曆撒的兒、霸多兒、絕世之英雄相踵
出、拓遺業、振積威、竟至於一統宇內乎、凡虜勢之
弛張進退、果可豫占乎、否也、

近代五大洲之地形、無不通曉、舟車之利、無不可屆
之域、混壹寰宇之舉、似亦可庶幾、太西英主、未必不
存斯大志、雖然、地至大、則難於吞併、人秦衆、則不易

遍服、雖懷此志願、豈有克酬之日、願弱者先為所殲
滅、強者可永存、以靜觀狡虜之盛衰、故有國者、尤不
可不任賢愛民、整飾武備、以圖自強之術也、

一夷俗武斷、不為漢土文縟、決矣、但其命官分掌、
果有文武之差乎、養才育士、有學賞之設乎、治法
貴森嚴乎、貴寬大乎、凡其人心風俗、存宓義葛天、
汗尊杯飲之遺乎、而歷世之久者、則古氣散蔓、或
務修飾文、為如拓跋奇握、温党羅氏乎、如鄂羅斯、
愈人愈昌、此其道何修何講、而能然矣乎、蓋其生
也、蠢蠢然而與居、狺狺然而相爭、凡其居處飲食、

衣服無有制度節數揖遜之禮是夷狄之所以為
夷狄也所謂儒家斷案不過云尔然非得通覽博
雅之言審其情狀則考諸心竟有未安所以不憚
煩而審問之也

大西人陰狡多智烏有必義葛天之遺風耶但其祛
虛文而要实效甚不識倫理而自有其倫理所以國
稍治傳世緜久至政之寬猛則各國殊尚不必歸乎
一但如明清之刑法峻酷萬國所未曾聞在大西可
保其必無也就中風氣夙開文物盛備如熱尔瑪臣
垂如意太里垂今皆萎靡不振特後起之雄廣野沈

鷲如羅利尹夷日益盛大亦必然之勢也願太西政
俗予未悉其詳請更訊諸談博者

一今之策虜率持三說其一縱虜上陸以短兵鏖
諸險其一環海列礮虜至輒發其一則曰與坐以
俟之寧逆而擊之聚散出没挾輕舸挑巨艦未必
不逞嗚呼是皆怛怛然自救之不逞惡有於策虜
哉嘗竊按輿地圖蓋字內之稱大洲者凡五然而
三分我垂細垂而二及四洲之地彼咸占奪而窮
據焉獨寒帶之右赤道之左塊然乎其間環以大
海者是為字內未闢之大洲指新阿蘭嘗試量其方位

占其氣候、与我亚細亚南北及、而距極、同世五度、
則知其冷温中節、果非不毛之地矣、夫先者制人、
後者制於人、彼方他務、未暇及焉、則取以有之、孰
敢禦我、於是制其艦、鑄其砲、礮、載人畜穀粟至、
輒合類、分擅之於其四方、設凡相生相養之道、統
之以政、待其力積、績奏、根塹畧建、然後達觀宇內、
橫絕海路、懸軍万里、直擣巢穴、則彼將蒼皇失面、
不知所出、則亦何事於我哉、是其策虜之一道、所
以与衆議迥別也、而世之腐儒俗吏、齷齪之徒、往
往贈天下之大勢、輒以忽必烈豐臣氏謬舉、曉、

然藉口不知二氏所為皆出一時誇張而無成算
熟慮一定之畧在焉夫我

神祖神后之於東西夷姑置之自今諸夷畧諸洲
紛、四出蠶食無方長征遠役兵每弗頓彼以醜
種尚然我而為不能豈非自誣歟聞鄂羅酋長畫
一母乳五兒因置諸左右以充坐銘其意豈以吞
五洲自期者乎噫嘻我不之覺而徒規、乎自守
之說安知異日果不為彼所乳也曰慨然述持論
并質之云

我邦舟楫之未便海路之未諳水戰之未素講印度

臺灣之近且不易至矣望乎新和蘭且果為冷溫得中之沃壤太西之務遠畧而洞悉海南形勢斷無不先我著鞭之理今不知彼已而疲民黷武輕舉遠征有往而不反之悞徒開釁端無少卑于國家智者不為也

方今諸夷之傑驍者鄂羅為魁英黎次之而英黎之地与阿蘭相隣官減阿蘭市舶限以二隻今許以數十待其說入謀定充以我兵託而左運萬里直破龍動既而憑其豐富聘其威力大占形勢席卷而東則鄂羅之大亦不難敗二虜既獲二洲

既跨宇內之命由我制之可指日而致蓋斯說也比諸前論其功太速是以其事太危亦諺所謂探虎穴捕虎子之意要在自決何如并錄以質之云大言無當不可指諸實用殆侔画餅

按侗菴先生潛心海寇之事故其一話一言皆可為知彼之一端所著海防臆策二卷収于海防彙議翼中別有泰西錄話一卷拈出于左

泰西錄話

從來泰西諸國之論劃然判為二說務遠畧者一意航海互市無遠不至專以吞噬為事有弱小之國輒

攻而取之、主修內者、整飾法制、綏懷黎庶、武備嚴而積蓄饒、今國勢盛強、無讐可乘、二論迭相觸、拂不歸乎一、尚修內者、深斥事遠畧者、貪遠而遺近、封域廓大而疆內虛耗、非策也、如伊斯把尼亞、波尔杜瓦尔、似杞斯獎、英機黎專事遠畧、五大洲之地、莫不為其所削奪、而國日滋富強熾昌、亦可謂巧乎立國矣、泰西人之見、以弓矢刀槍當敵、為不仁、謂如此者、兩敵相搏、持久不決、死傷必無數、不如赫然以大煩巨砲摧破之、視之類慘虐之舉、而勝敗頓決、殺傷不至甚多、斯為仁人之舉、不知斯論中窾乎、否也、吾以大

煩巨炮制敵、敵亦振奮、以大煩巨炮抗我、確門每戰、積屍如邱山、安見其為仁、泰西人特侮蔑弱小而云爾、故僅說得一偏、

邦人光大夫、漂到俄羅斯國、留住多年、一日有所之、途遇俄羅斯帝出遊、去所戴笠、避于路傍耳、俄羅斯邦制如此、易簡可想、本邦及支那、扈從護衛之夥、較之覺過于繁重、然亦惟泰西之俗、絕無荆吳刺客之患、故能若此、本邦支那、間有刺客之慮、故不得与之侔、但可痛減扈衛、選熊羆不二心之士、以備不虞、亦大省勞費矣、英機黎與拂蘭察、甚相惡、而客歲英機

黎女王親往拂蘭察和蘭國議事亦以如秦昭田楚
懷石勒執王浚之事泰西浙不之為故也本邦支那
則決不得然
泰西諸國大都風土凜冽五穀弗殖貨財鮮少不與
他邦互市無以自贍故航海通有無以備饒裕曆年
之久因漸富實而舟楫益巧則厥志寢大更交易於
萬里外之邦以細大利既而國日益昌熾則厥志從
而滋大周覽所互市之國有小弱易與者輒造釁誣
罪伐而取之富強之極又且不以吞併小弱自足敢
與大國為難如往歲蠶食莫卧兒不存遺種數年來

以鴉片之禁與清交兵屢破其師多奪其屬島及瀕
海之地是也泰西國勢輾轉至此真古人所謂孤始
願不及此者然洵可畏而惡矣降于今日吾將奈彼
何哉不可不中儆武備整設海防以待之也亦不可
不取彼所長以施於己國也

犬馬去勢則猛悍多力人去勢則壘闕不怯死近歲
英機黎行師間有用之者選去勢者數十輩提刀居
前隊令直進犯敵鋒然後以大砲隨而擊之雖至堅
之陣無不立摧破李世人之彈巧智乃至於斯又人
之去勢者發聲極清亮俄羅斯樂人或有之明太祖

鐘山先廟樂工亦嘗用去勢者、
泰西之史有云、大莫卧兒國、為太西所蠶食、國勢日
蹙、迄近歲、纔有一城、君方二里之地、亦不能自保、而
為隣敵所吞滅、永絕血食、大莫卧兒之先、崛起乎撒
馬兒罕之地、以混一天竺、盛大富饒、甲於萬國、末路
卒至此、亦可憫矣、據輿地誌畧、則莫卧兒沿海之地、
自數十年前、盡為泰西人所據、尺寸之地、非復莫
卧兒有、亡兆已灼然、嗣後日朘月削、以迄乎盡、蓋莫
卧兒君臣、相與恃國之盛大、日夕佚樂暢適、不思遠
圖、士氣頹靡、武備廢壞、以致忽諸、亦殷鑒之章、者

也、

莫卧兒之為泰西所侵、削斬焉云亡也、不獨數百年
之宗社、一旦絕祀、遺臭百世、又使泰西人占此地、為
根據、以病迤東諸國、永貽毒千載、遺臭百世、事屬既
往、不必咎、貽毒千載、則將來之禍、不知底極、更覺可
愾歎耳、前乎是、泰西人雖侵奪南海諸島、及榜葛刺、
而禍小荒陋、故害不甚著、莫卧兒盛大之邦、為其所
竊據、而其禍方熾、世之論者、大率以為、英機黎拂蘭
察之屬、遠來自泰西、不足深憂念、絕不知、既據莫卧
兒之地、則與清為並隣之邦、如金元之於中州、可畏

之極也、隨園集載、英機黎伐呂宋、虜五百人、泊常門、粵東大驗、縣令印光任、責使歸之于呂宋、英機黎唯、唯奉命、光任畫折英機黎之策、不過云、夷涉大海、數千里、糧食必乏絕、吾過糶以困之而已、此計恐不足以窘英夷、支那人驕矜浮誕、全不諳外夷情、隨園所記未必得實、

通者、泰西人之議曰、凡兩間之國、有不敢与改羅巴通好者、必往伐之、泰西諸國、近歲日益富強盛大、吐凶矜之言如此、或曰、泰西有一母哺乳五子、畜此盖写俄羅斯女主之志也、言將混壹五大洲、子其億兆

而撫字之也、志尚之大、可想、泰西列國中、契爾瑪尼亞、虽曰古來帝國、而總能自保、都兒格至強之邦、而不甚務遠征、伊須把尼亞、波尔杜瓦爾、昔嘗隆興、降乎近代、衰荏弗振、此等國、必無大志、獨俄羅斯、英機黎、拂蘭察、三國、聲勢方熾、而英機黎最長乎吞噬、斯三國、皆有席卷八紘之志、今五大洲之地、蠶食已遍、其雄忠亦稍酬矣、猶且貪饕無饜、其禍未有艾、洵可畏且惡也、夫南北亞墨利加、利未亞洲、其人蠢昧昏惰、其為泰西所吞滅、固也、亞細亞洲、產聖產賢、產英雄、遠愈乎改羅巴、乃坐視泰西囊括四大洲、漸削

奪亞細亞、而袖手無一策、不能存過防之、豈非可愧之甚耶、英機黎降卒語清人曰、吾國今女王、實為開國而來、未嘗有之英主、顧英機黎之國勢、駸々熾大、而知降卒之言、非誇也、俄羅斯帝伯多祿、稱中興聖主、勲烈赫曜、而其后加太里那、才智与之匹、翼成夫鴻業、伯多祿臨殂、至遺命禪帝位、其卓邁可知也、其他泰西列國女主、祛積弊、致盛治、以垂百代規準者、不遑更僕數、較之支那后妃干政、必亂敗邦家、一十年間、僅、呂雉武曌、而二人又功一罪、十、矧然殊科、此何道而然也、蓋泰西諸國、多北極出地、四十五十

度以上者、風土凄慘、陰氣周事、故婦人之勇智、自有翻、邁倫者、且也人用則為虎、舍則為鼠、支那不獨陽和溫暄、故婦人資稟、淺、亦推抑之甚、才畧不得舒展也、泰西待婦人、與男子無異、推戴欽仰、極其尊重、故婦人神王氣充、才畧全湧、泰西之所以多女大夫、職是二者之由也

泰西之俗、從無師古之說、專取道目前日用、古之軍法有所窒碍、則立變而從今之制、軍器兵械、有稍不利、則亟改作以趨便捷、如知甲冑厚重、不便馳驟、拳軍不着戎衣、察大砲之利於刀槍弓矢、講肄鍛鍊、日

精月巧、冲天砲、モルキール、ベキサンス壁山銃之屬、一發輒殲數十百人、可
以見其風尚矣。本邦支那之俗、尚祖古、而不甚論事
情、語兵法則墨守孫吳韜畧、而不少變、論兵械則專
講明刀鎗弓矢、而不甚精於砲銃、見古人之遺甲遺
弓刀、則百金購收、十襲珍弄、或且倣象古制、製造軍
器、不必究其便与否、斯其崇古之意美矣。曰切於時
用則未也、本邦支那之舉、近於王道、而少流於迂、秦
西之舉、類於霸術、而秦便於事、惟其秦便於事、所以
見效殊速、而甚可畏、

籌海私議

宥陰迂夫

審夷情上

夷情猶賈情也、嘗聞都賈之鬻衣者乎、懸衣於肆以
延客、有田舍兒問價、一二應答之後、怒其聲厲其色
以加之、使之氣怵魄褫、必不得不買、夫骨肩温色怡
聲以媚客者、商賈之常態也、今則反之、彼固為卑以
順之、十或失五、威以制之、十不失九也、當今英夷之
情、何以異乎此、夷既劫滿清、得其志矣、其視我猶田
舍兒、曰慄之以清人敗衄、而勸之互市、則必懇而應

之、若不應、則歲三四次、遣遊船、調其邊海、或需薪水、或掠人畜、或測山川、或忽入而忽出、勢如將闕、邊釁者、彼懼、開釁之、遂致亂也、必將憂之、憂而後遣使再謀、彼必應之、不出三五歲、而我之欲獲矣、是固以威制之、定術也、故迫、噴、噓、以捧書、過琉球、以測地、軼朝鮮、以抄物、入浦賀、入崎港、入蝦夷島、以示陸梁之狀、其情可指掌、而睹焉、且既許互市、則必將借地、既借地、則又將築城、夫借地築城、然後禍不旋踵矣、伊斯把泥、丑之奪呂宋也、初乞借牛皮大之地、迨許之、即以牛皮為縷、環而經之、建城置兵、遂以取之、清乾隆

珠山即舟山

中、英夷乞借珠山、天津、弗允、嘉慶中、乞舟山、又弗允、至道光一捷、卒得廣州、福州、寧波、廈門、上海、夫其辭令、詭譎、加於呂宋、志欲牽連、加於滿清、皆慣用之術也、或曰、夷兵強於天下、我不許互市、則憤怒來寇、如豐公之征韓、如忽必烈之侵鎮西、所謂疾雷不及掩耳者、而子獨患於互市、儼地、不亦末乎、予曰、不然、豐公、忽必烈、喜誇大者也、英夷、密等、數者也、喜誇大者、其舉兵也、暴、密等、數者、其出師也、漸、夷之計、必曰、用兵、則日費千金、通商、則歲得億萬、戰勝有名、豈若交易、有利哉、今日取一、豈若明日取十哉、市之鴉片、以

成人命、竭之金穀、以涸國精、勸之法教、以移民心、見
釁而舉之、易如振箠、先利故後兵、後兵故其利必獲、
焉其如將先兵者、形也、非情也、慕容農謀滅苻堅曰、
取果于未熟、与自落、不過晚旬日之間、然其難易美
惡、相去遠矣、英夷之篡人國、亦俟其自落、虽晚數十
年、而毋悔也、夫唯如是、故互市之請不可許、而邊不
可不備、

審夷情下

備邊之策如何、曰、戒沿海、侯伯守令、測邊境、遠近潮
汐、深淺、沙淤幾里、崖岬幾仞、某港巨艦可入、銃架砲

臺可設者幾所、長墩坑道、可築且鑿者幾丈、震天雷、
神龍箭、凡百銃礮、宜備若干門、線藥鉛鉄彈、稱之、某
墩宜置燈燧、某岬宜置瞭望、要害可建鎮衛者幾何、
神閣佛寺村家、可用以為營寨者幾何、府城距某鎮
某寨、塗程幾里、某城可以應某府、某鎮可以援某衛、
隊長某可以守某城、船將某可以赴某地、粟如千石、
可食若干人、支如千日、大小艇舸、水工馱馬耕牛、与
農夫獠子、蠶丁漁戶、可取以補闕伍者、佛院神祠、豪
富巨族之府庫、園窳、可假以藏兵械者、有幾、弓馬刀
槍、我所長也、則倍精之、水戰火術、彼所長也、則效而

修之、指置既定、日月繚練、而其要則莫使闔國之士
氣、如長崎之犬、西土嘗貢虎、檻諸長崎、日食生犬數
頭、無幾何長崎之犬、盡有獵夫畜犬、不肯出、吏徵之、
獵夫曰、吾非敢愛之、吾犬甚趨、吾恐其傷虎、是以不
敢、吏強之、投諸檻、虎不即噬、相視而怒、頃之、犬飛騰、
嚙吮殪之、夫虎天下之猛獸也、犬雖趨、非虎敵也、而
殪焉、豈非兵法所謂死戰之謂乎、夫使六十之州、百
萬之士、悉如此犬也、則英夷之堅艦神砲、我可白楮
以撻之矣、雖然、為之有本、亦在乎朝廷白死守之策
而已矣、語不云乎、虎狼之猶豫、不若蜂蟻之致決、又

曰、斷而敢行、鬼神避之、北條相州、斬杜世忠、而蒙古
十萬之軍、鏖宋欽宗、臨戰議和、而身為女直擒、何者
將士之勇否、在人主之斷不斷也、議者乃恐、備邊之
令、動搖人心、甲辰使船之事、秘而不發、如韜惡臭而
蓋之、天下之人、信、乎迷焉、蓋以天平宝字之事、察
之、以唐安祿山反、勅太宰府、嚴海防、夫祿山及乎、唐
耳、何與我事、尚且嚴備如此、然而海內綏寧、黎元鼓
腹、未嘗有一夫揭竿而起者、人心之動与否、在於處
置何如、而不在於戒防之令也、明矣、今則猾虜禍心、
洞如觀火、而備禦之策、厝而不講、揣、焉、惟人心之

動之懼、不亦悞乎、騎者膽壯、馬有餘勇、主人晏起家、
僮不掃門、一人之心、千萬人之心也、為今之計者、宜
令天下日、甲辰之贈簡、所言如是、我答之如是、來寇
則戰而殲之耳、須嚴備以待之、如是而六十之州、百
萬之士、不以死衛社稷者、未之有也、

修戰艦

戰在氣、氣伸則勝、氣屈則敗、夫攻者恒勇、守者恒怯、
非攻者盡勇也、氣伸也、非守者盡怯也、氣屈也、故禦
外寇者、不可不以攻為守也、欲以攻為守、非邀諸洋
則不可、邀諸洋者、非造堅艦則不可、物固有以小制

大者、亦有不可以制者、使鼠附象、七八頭足以困之、
使雀當鷗、則數十翼之力、不能勝其一翮之風、故引
明祖破陳友諒之事、以為小舟足以克巨船者、非也、
何者、西虜之船、占漢人之水鬪、異其堅脆巧拙故也、
勃那拔兒的之占於佛郎西也、英機黎備巨艦於邊
海者、四十餘艘、安南之侵閩浙也、阮元用三年之功、
作巨艦大煩、乃能勒之、咸南塘曰、福船高大、而倭舟
矮小、故乘風下壓、如車碾螻蟻、是以取勝、設使倭舟
如福船、則吾未見其必濟之策也、是言也、我可及顧
而悟矣、然則如何得以造之、曰、宜莫若從享保故事、

享保中

大君欲得遠西御術、令紅毛人貢善馭者、又欲獲百爾西亞之馬、亦令紅毛人敵之、皆應命弗違、夫紅毛之於英夷也、形服而情不服、豈宜不服而已哉、必將傾而摘之、且紅毛之示誠於我久矣、曩時英夷之侵滿清、紅毛告我、以宜豫備、令其情信乎、使之貢兵艦若船匠、彼將悅而應之、令其情偽乎、我曰其偽而用之、亦足使以制彼而無辭於拒焉、夫船既已成矣、下令諸侯、使十萬石炭、效以作一隻、遞而上之、百萬石可以作十隻、其十萬石以下、大朝貸而給之、或使二三

藩造一隻、無事則用諸漕運、有事則用諸戰鬥、亦一舉而得之利、而寓兵於農之意也、然議者多以祖宗之禁、与姦人通異域、難之、吾請得以解之、夫船制以吾百為限者、創於猷廟之時、非照祖之令素然也、法因時而建者也、善治國者、斟酌法外之意、而裁之、猷廟之禁大船、防妖教之入也、今之制巨艦者、備妖賊之寇也、二者皆不悖、照祖之意焉、若夫恐姦人通異域者、宜嚴定律令以防之、船之在縣官者、平生漕運、設艦督及輔丞、監察、重其爵祿、養其廉耻、有姦賜之自裁、沒其采地、其在諸藩者、以番頭為司

船置佐貳之司察有姦則誅其吏士削其君之封唐
太宗不貸賊吏罪金人之法吏有贓私者殺之無赦
洋姦之刑法唐金賊吏之律而可矣今夫海運之船
遭颶而覆且漂者歲不遑枚舉而飢荒之在一方雖
豐熟之邦不能假貸以相救豈非由舟制不利之故
乎享保癸丑西州凶歉死者十七萬人天明丙午奧
羽不稔死者七十萬人天保癸巳奧羽又不稔死者
四十餘萬而諸侯拱手無策今製堅艦令其為督司
者通天象地理操使之術占度之器皆練而習之則
終年窮世萬無漂沒之患一逢荒歲一仗之使約言

於都而糴糴之船揚帆於海西州之飢奧羽可以移
粟北陸之凶南海可以辨急及有蠻夷來聘而情不
可測如文化之羅利天保之喞蘭我亦出大艦二三
艘以護之其他將士皆在陸寂然無形以察其動靜
則其為吏整以暇其為備幽以靜其為兵寡以佚我
有所恃而彼有所憚奔馳之勞財用之費亦可以省
矣吾聞之近歲夷船之來沿海諸侯疾乎驟奔悉闔
國之力出輕舸短艇數十艘以環之紛然如附蟬之
蟻譁然如吠盜之犬而守備之虛實士卒之勇怯器
械之堅脆悉形矣幸而無憂也若有事則一礮駛走

靡異乎累瓦之崩雷震、漢文帝謂、霸上棘門之軍、兒戲耳、今之邊備、吾恐夷虜之為漢文之目也、

七等

成至大之功者、必資至精之筭、量包江海、思折毫毛、故二者相得而為用、量包江海、故至大之功成、思折毫毛者、故至精之筭定、筭定而後功成、故思折毫毛者、本也、今夫醫之配藥、草核木皮、骨角砂石、悉有分兩之權、使其劑爽錙銖、則必不能瘳病、匠之用材、棗廬檤染、楠筭閔閭、必有丈尺之度、使其計謬分釐、則必不能造室、故成功必資於筭、筭莫如精、兵者國之大

事禦夷者、大之又大者矣、是不可不用至精之筭也、而今之邊筭、何其不精之甚也、請以吾所聞論之、浦賀之砲架、在平根山、以利俯射耳、夫砲有宜俯射者、有宜平射者、而破大船者、利尤在平射、以洞船腹、而浦賀則闕焉、且煩臺之在房相二州、以扼江戶者、大率不過一二貫砲、夷船堅牢、非巨礮越三貫者、不能洞相之、与房洲嘴相距、近者三里、遠者五六里、而一二貫之砲力、不能過五六町、使夷船颯其正中乎、房相之砲、俱不能及、使近其岸而鞅乎、雖中必不能穿、紀之為州、突出南海、與港九十有五、

德廟時、設烽墩、銃臺於要港、數里相望、戒備則約、莫不至焉、今則廢壞不修者數十年、此余之所足改而目觀也、四陸、菓里、防海之備、能不如房相、與南紀者、或解矣、昔豐公之征韓、韓人謂我劍利、欲作錢甲防之、既成、重不可服、英夷之入、滿清、清人流毒於川、英夷用、分離術知之、計卒不行、鄂羅斯之寇箱館、船有直指煩口而來者、審知火力不能及故也、替於古、而察於今、邊防之要有七焉、一曰、測地理、地之為形、有一定者、有變遷者、乍鹵廣狹、暗礁高卑、津港寬窄、崖岸深淺、與陵阜、谿澗、沛澤、漫防、葦荻、林莽、是形之一定者

者也、海有疾風、則有朝為沙丘、夕為陷阮者、川有鴻水、則有昔為洲渚、今為淵潭者、是形之時變者也、二者不可不審測也、二曰、設礮、煩、夷船之炮、大者重八九貫、小者三四貫、則我之所備、匹之倍之可也、且火器之為用、不一而足、飛劍、燕尾、虎奔、豹奔、諸箭可置、滾毬、風雷、滾霹靂、火毬、噴罐之屬、可置、天墜、轟雷、地雷、伏火、自來火、槍、可置、迴礮、白礮、忽礮、一耳礮、蝴蝶礮、子、可置、三曰、備船舶、有走舸、有海鷗、有梭船、有櫓船、有拔的刺、有蒸氣船、戰艦大者、載煩百門、兵千人、小者、載砲十門、兵百人、大船如腹心、其次如手足、其

カニ、モルキ、ル、ホカ、シ、カ、ル
迴礮、白礮、忽礮、一耳
礮、等、苗、說、北、海、防
彙、議、補、中

好
次如耳目、又其次如毛、如爪、大小異用、異用各有時、
關一而不可、四曰造鵝墩、造坑竹障、鉄屏風、防砲者、
莫如墩、与坑道賊、突噴丸、使士卒或隱竹障、或蔽鉄
屏以避之、五曰習水、聞撞生子能行、使亦足以發山、
及壯、跛如鉄石、奔如熊虎、然使之入海、曾蜚婦之不
如、習使之然也、故虽有驍兵悍卒、非習水則弗可用、
六曰簡死士、殺身而後敵可殺也、必死而後功可期
也、雖然人豈有如死者哉、必也因恩義与意氣以忘
死耳、選十六以上、三十左右、氣膽壯猛、志力堅剛者、
以為團、間其身、專其伎、豐其餘廩、宥其過失、而任以

三軍之勝敗、廟社之安危、一旦有事、或帶火以入敵、
或泗水以攀船、或單力以先登、惟我所使、無施而不
可、故死士十、足以當萬夫、然是選也、不可衆、衆則濫
矣、七曰熟繚練、今集童子十人、学舞、肆之數句、晴之
所視、手之所舞、足之所踏、罔不均齊、廢三日、則不能
矣、熟與不熟之謂也、

先皇之制、中分衛士、一日上、一日下、每下日、即令在
府習兵、英吉利之法、七日而小閱、七十日而大閱、習
熟如此、而兵乃可用矣、抑此數者、諸侯莫不知也、所
患者、粗而未備爾、夫其粗而未備者、以為當吾世而

虜或不來也、獨不聞韓李珣、明朱應昌之事乎、當我豐
公之未入韓也、一則欲養千萬兵、一則獻防海五事
三策、一時莫不錯愕、以為狂且愚、及有壬辰之事、乃
又驚嘆以謂、二子醒且神矣、嗚呼、使以其事後為醒且
神之心、移諸往年為狂且愚之時、其禍福為何如也、為
明韓者一誤矣、後之為明韓者、勿再誤焉哉、

陸闔

明諸葛聲、記我用兵之狀曰、戰士善伏、數遠出我軍
後、兩面夾攻、每以寡勝衆、華人輒墮其術、其未戰也、
團結分散、三、五、一、一人揮扇、伏者四起、謂之蝴蝶

陣、尤精刀法、刀長五尺餘、用雙刀則及丈餘地、又加
手舞六尺、開鋒凡一丈八尺、舞動則上下四旁悉白、
不見其人、塩谷子曰、嗚呼、此明人所畏、而亦可加諸
西洋戎虜者也、吾嘗考古今兵馬器械之沿革、而竊
有異焉、觀於圖書所傳、上古槍稍俱有焉、而中古源
平之戰、南北之爭、弓馬劍法盛行、而槍獨廢不用、及
至永祿、天正、槍始行而弓馬衰矣、是其故何也、蓋上
古雖有槍、用諸鹵簿儀仗、而衛士習之已、非如輓近
陣制、令一隊之士悉執之也、及二源與於康平文治、
所領兵多在關東、關東馬多於天下、馬上弓刀俱利、

而槍獨不便、故二源最以弓馬劍法稱雄、南北朝之時、
楠中將嘗一用槍、未幾而戰死、至天文中、外蕃傳鳥
銃、銃之射馬、百發不失、於是乎、騎戰變為步鬪、而槍
乃大行、理勢然也、夫我與戎、技有短長、而我又有古
今之異、審其短長、擇其古今、莫如復騎戰而益練刀
法、夫馬始離船、蹄痺不能走者、數十刺、則戎雖有馬
不可遽用也、而其卒力、炅氣、鈍身、無堅甲、接戰所用、
專在劔首銃、劔首銃可刺、而不可斫、可防而不可制、
即防矣、亦不及刀、及之便、我士甲精而身捷、加以鈗
刀、舞動一丈餘尺、可刺可斫、可防可制、其列馬也、一

字直陣、分為數隊、鞍頭置短銃、一發之下、揮刀而驚、
四當八突、庶乎無人、是陸鬪之長技也、或曰、復騎戰
善矣、然自大坪道禪變取法、今世所習、皆禮御之法
爾、所謂軍取者、非究其潭奧者、不敢傳、雖傳而不常
習、且養馬者、截鬣燔毛、斫筋剥爪、務以華外貌、而馬
之天鑿矣、則雖欲復古、盖有不易、遽變者焉、曰世有
牧師者、把一條繩、捕野馬而跨之、驀水蹴石、涉險凌
阻、無与坦途異、有逐犬戲者、放犬於埒、驅迫射之、左
歌右側、蟆伏狼顧、使馬如身、此二者、皆習與用一者、
而方今諸侯、亦有為之者焉、推而及諸天下、在朝廷

一號令之力為耳、夫勝敗之決、在短兵接戰也、而我
之所讓于戎者、惟砲、砲迫近則不為用、使我之兵不
畏死、不願傷、一伍殪於火、而數隊以間而入焉、則砲
雖巧、非所患也、故曰莫如復騎戰、益鍊刀法也、

